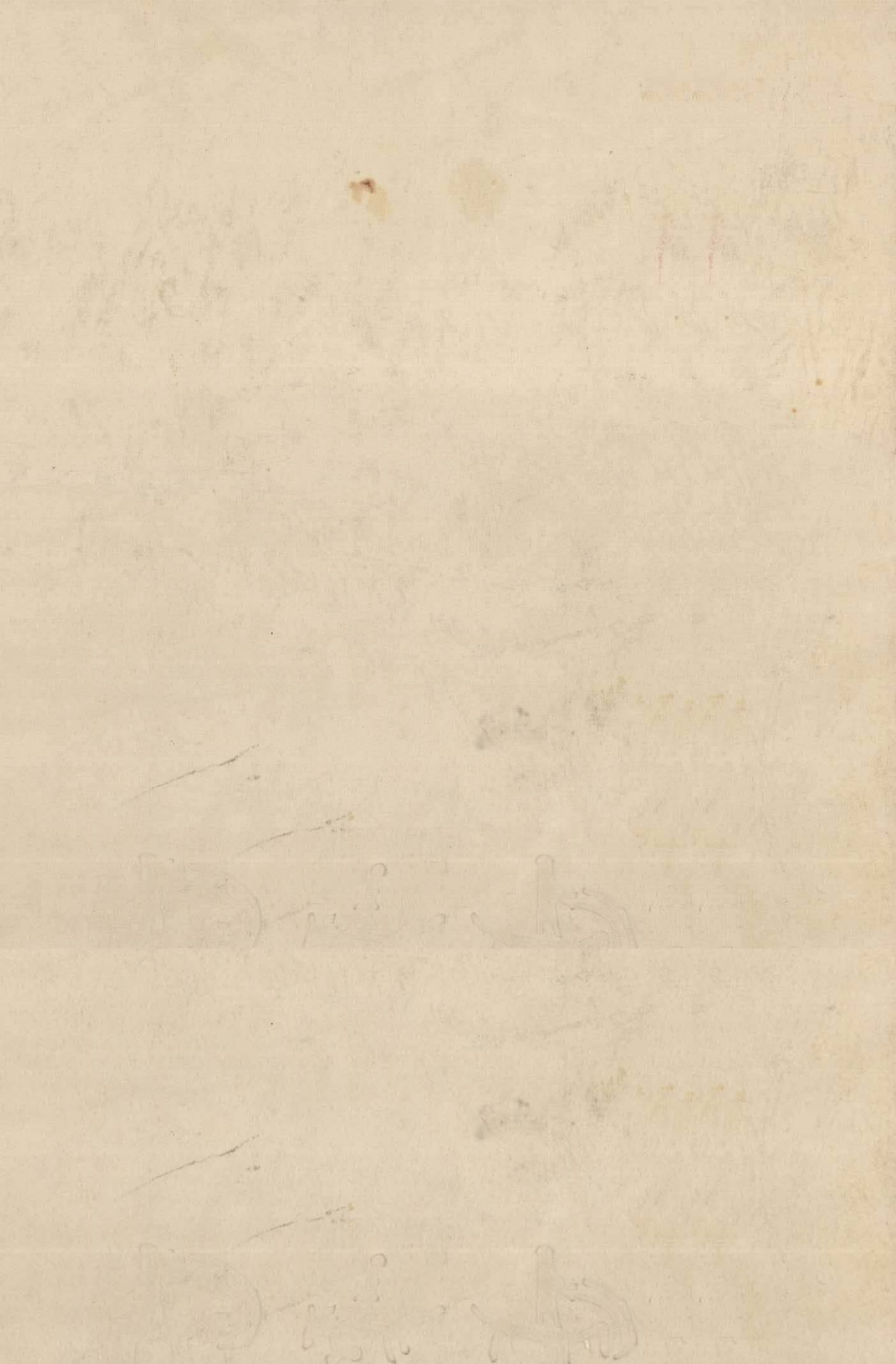




さまざまな自画像

エッセイ集 4

井上ひさし



中央公論社

さまざまな自画像

エッセイ集 4

八五〇円

昭和五十四年六月十月初版印刷
昭和五十四年六月二十日初版発行

著者 井上ひさし

発行者 高梨 茂

印刷 精興社
製本 大口製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八・一七

電話 五六一一五九二一

振替 東京二二三四

©一九七九 検印廃止

日本音楽著作権協会（出）許諾

第七九〇七七五八号

目次

さまざま自画像

恐怖症者の自己形成史

*

名前について

浅草と直木賞と私

道元の洗面

『正法眼蔵』

下戸の屁理屈

コンチキ・バンバン

脱線余暇論

罐詰体質について

9

24

27

33

37

39

44

58

63

わが蒸発始末記

67

愛は時を喰う

74

わがマイホーム遍歴

77

自画自讃

81

主題歌

82

*

わがアイデア母さん

86

現代歌情

「また逢う日まで」

101

「とても不幸な朝が来た」

110

「浪曲一代」

118

「涙から明日へ」

127

「港の別れ唄」

137

「お金をちょうだい」

147

民謡

156

「個人授業」

166

淋しい餓鬼大将

淋しい餓鬼大将

185

シュシュシュシュ

190

最良の意味の「先生」——宇野誠一郎

195

憎いあいつ——藤本義一

198

歌手野坂昭如

201

天才アカボン——赤塚不二夫

205

芸者遊び

208

女房の面の皮千枚張り

―ことわざ・川柳にみる女の一生

気に入らない銀座

都と東北との関係について

カントとフロイト

捨て子

さよごまな自画像

エッセイ集
4

さまざまな自画像

恐怖症者の自己形成史

蒸気機関車の進行音、あるいはその汽笛、雷鳴とその先駆けをなす稲妻、外国人、お面をかぶった大人、いつもとはちがう場所にある絵本、暗い部屋、とりわけなにかが隠れていそうなその部屋の隅、夕暮どきの墓地の横の道、外から帰ってきたときの母の不在、また夜に入ってから母の外出、大きな蛙、蛇、それから学校に遅れるのではないかという心配、他人から好かれないのではないかという不安。人間はこうした恐怖をひとつひとつ克服しながら成人して行くが、ほとんどの場合、対人恐怖や高所や広場や閉所などの状況恐怖は、克服されないまま心のどこかにまだ残っている。いや残っているどころではなく馬齢を加えるごとにそれらに対する恐怖はますます確固たるものとなり、もはやほとんど恐怖症^{フオビヤ}という症状を呈しているといってもよい。対人恐怖、ないしは赤面恐怖、これは日本人ならだれでも大なり小なり持ち合わせている強迫感情らしいのでこれを差引くと、ぼくはつまり状況恐怖の虜囚^{ルイ}ということになるだろう。

あると思えばない、がしかしな思っているところはある、それが文壇というものだそうだ

が、とにかくこの世界にはパーティが多い。このパーティは状況恐怖症者にはもっとも苦手なもののひとつで、それは言うまでもなくパーティ会場には広場と閉所とが同時に在るからである。会場が広場で、ここかしこの人集り^{だか}が閉所になる。加えてその会場が超高層ホテルの最上階だったりするともはやどうにもならない。窓からできるだけ離れた壁際に立って水割の入ったグラスを舐めながら脂汗を流しているほかに手はない。フロイトは列車恐怖症だったといわれるが、列車恐怖もまた状況恐怖のひとつだろう。ぼくも高校生のころ、列車がおそろしくてならなかった。〈列車が動いているのだ、電柱などの近景、人家などの中景、森や山や雲などの遠景が動いているのではない〉と何度自分に言い聞かせてもむだで、周囲の光景（これを大袈裟かもしれないが「世界」と名づけてもいいだろう）が動いているように見えてしまう。世界はぼくと対立し、同時に世界との共感的結合が切れる。そして言いようもない淋しさ、おそろしさに襲われた。しかも恐怖症者は、精神医学者の高橋徹氏が「フォビアは、あるものごとを恐れる感情が自己の意志に反して現われ、しかもそれを意志の力が抑止することができず、しかしそれにもかかわらず、この感情が自己に属し、自己から発展したものであることを自覚している体験」（現代精神医学大系「三のB巻・九二頁。中山書店。一九七六」と定義しているところからも明らかのように、その恐怖が不合理で滑稽なものであることを冷たく指摘しつづける自己の中の他者性とも戦わねばならず、恐怖すればするほど唯一の味方である自分が真つたつになり、世界と切れるついでに自分とも切れてしまわざるを得なくなる。別の言い方をすれば、世界も自分もどこかへ雲散霧消してしまい、恐怖が学生服を着て面跑^{たきび}を吹いているといった状態になってしまう。おかげでぼくは高

校三年の春まで往復三里を歩いて通わなければならなかった。列車恐怖が突然治ったのは近くの女子高校生に好意を寄せたのが因^{もと}、その子が汽車通学生だったので、ぼくはふたたび汽車で登校することになったわけである。こうなると恐怖症は、その字面とは裏腹に他愛のない代物になりさがるが、ひょっとすると恐怖症は人間の道化性や演戯性とどこかでひそかに繋っているのかもしれない。

状況恐怖症者であると標榜しながら映画館の暗闇にはうきうき溶け込むというのも都合のよすぎるはなしだ。そこには広い客席と周囲の観客と暗闇の、三つの状況恐怖が重なっている。ちょっと気のきいた、そして真面目にフビアを病む恐怖症者ならば、広場・閉所・暗闇のほかに不潔恐怖（あの汚い床、チューインガムのこびりついた椅子）、動物恐怖（床を這いまわり駆けまわる鼠たち）、音響恐怖（音量をあげすぎる映写技師、女性観客たちが絶えずがさごそと鳴らす食物の入った紙袋の音）といくらでも恐怖の種を見つけ、そのことによって一層足を遠のかせるにちがいない映画館へ、のこのこ出かけるのはわれながら面妖であるが、このへんの事情は自分にも説明がつかぬ。強いて言えば、ぼくの場合には高所恐怖がもっとも強く、以下、広場恐怖、閉所^{ウストロフロア}恐怖、女性恐怖、来客恐怖、会話恐怖、醜形恐怖、稻妻恐怖、動物恐怖、疾病恐怖、埋葬^{タフエ}恐怖、死恐怖の順になるだろう。死に対する恐怖が最下位にあるところがちょっと滑稽だが、映画館はたいいてい地下か一階、せいぜい五、六階どまりだから平気なのだろうと思われる。その証拠に、ジャンボジェット機でマルクス兄弟の全映画を連続上映するという催しがあっても、ぼくに搭乗券を買う勇氣はないはずだ。

ある学説は、高所恐怖などで代表される状況恐怖症は、幼時に目撃した両親の性行為にきまつて遠因があると説く。幼児にとって両親は常に「見上げる」存在である。しかし、性行為中の両親は（もたれこみ）**立位**、たちがり**揚脚位**、セミがり**懸紐位**、ゴバンづめ**揚脚背立位**、**四肢位**などの立位を選ばないかぎり）幼児にとって「見下す」存在になる。幼児は常とはちがう両親の気配におどろき、不安になり、これは位置関係が逆転したせいだと心の深層で感じる。このときのおどろきや不安が成人して高い場所に立ち、すべてを「見下す」とき、にわかに甦って来るのだが、素直に甦らせては父母の神聖なイメージに傷がつく。そこで恐怖心で自分を眠れあがらせ幼時の記憶を心の底の底に封じ込めたままにしようとする。そしてやがて「見下す」存在になること、そういう場所へ登ることをおそれるようになる。

まことに俗耳に入りやすいあざやかな説だが、残念ながららばくにこの説を適用することはできないだろう。父親は四歳のときに死んでおり、そしてぼくの生れる前から脊椎カリエスで寐たきりだったからである。立位はどうしたって無理なのだ。となるとぼくが状況をおそれる原因となったのはいったいなにか。

国民学校の生徒時代、ぼくは「佐々木邦全集」を繰り返して読んだ。田中比左良装幀による布表紙の十巻本だった。とくに熱中したのは「次男坊」という小説だが、これをぼくは自分自身の予定表として読んでいたようである。この小説の舞台はまず「正晴君の村は半農半商だった。菟藟屋こんじやくがあるくらゐだから、豆腐屋もあつた。（中略）正晴君の村から〇〇町へは二里たつぷりある。街道だから殆んど人家続きで、村と村の堺のところ丈が松並木になる。（中略）〇〇町はこの界限

切つての大都市である。第一、郡役所がある。中学校も女学校もある。商業学校も農林学校もある。汽車がこゝから東京関西へ通じる。但し急行は止まらない」と設定されているが、これがぼくらのところと酷似していた。ちがうのは、ぼくらの村の南方二里余にある米沢市からは東京を経ないと関西へ行くことができないという個所ぐらい、莧蕪屋も豆腐屋も松並木もちゃんと揃っていた。主人公の正晴君が次男坊であるのも、生後三ヵ月で生死の境をさまようのも氣に入った。ぼくもまた次男坊であり、三歳のときに自家中毒で死に損っていたし、悪戯好きであるところもそっくりだ。何度も読み返しているうちに、ぼくが正晴君か正晴君がぼくか区別がつかなくなり、答案用紙に「井上正晴」と書き込んで担任教師から妙な顔をされたこともあった。正晴君は〇〇町の旧制中学から旧制の第〇高等学校へ進み、やがて東京大学へ入学する。そして親友の妹と婚約し、高等文官試験を通過したところで小説は終るが、ぼくは正晴君と同じ順序で出世の階段を登ろうと考え、国民学校五年の夏休みから受験のための勉強をはじめた。正晴君のあとに続くには、彼が〇〇町の名門旧制中学に入ったように自分もまた米沢市にある興譲館中学の入学試験に合格しなくてはならない。だが、国民学校六年の初冬、すなわち昭和二十一年十二月、担任教師が、「来春から学制が変わる。君たちは新制中学の一年生ということになるだろう」と告げたことで、ぼくは正晴君のあとを追いかけるのを諦めなければならなくなった。担任教師のはなしでは、新制中学の校舎となるのはいま自分たちが通っているこの国民学校校舎の一部であり、教師も今の顔ぶれのなかから選ばれるはずだという。なんと変り映えのしないことだろう、新制中学なんて名ばかり、これでは国民学校（という呼称も来春からは小学校になるだろう、と教師は言っ

いたが）の七年生というのと同じではないか。ぼくは熱発^{ねつぱつ}して三日間寐込み、それから鉛筆をボールに消しゴムを布製グロブに持ちかえたが、このときの落胆ぶりは相当なもので四十歳を過ぎた現在でも、「来春から学制が変わる」とぼくらに告げている担任教師の顔を夢に見て魘^{おそ}されるぐらいである。

無意識の概念を自分はフロイトよりも先に発表していると主張したり、死ぬ間際までフロイトの学説を評価しようとしなかったフランス精神病理学界の大御所ピエール・ジャネ（一八五九—一九四七）は、広場恐怖も閉所恐怖も高所恐怖もすべて本質は同じであると述べたあとでさらにこう続けている。「フォビアを生み出すものは広場、閉所、高所そのものではなく、慣れ親しんだ場所自分を支えてくれていた人がいなくなり、自分だけが孤立してしまったという印象である」。ジャネのこの言葉を「慣れ親しんだ状況で自分を支えてくれたものがなくなり、自分だけが孤立してしまった印象」と改竄すれば、正晴君のコースから外れたときのぼくの気持と重なるだろうか。とにかくそのとき世界の関節が外れた。さかのぼれば昭和二十年八月十五日にも世界の関節が外れている。

それまでの、天地の続くかぎり続くと思われていた状況が、猫背でちょび髭の男の、甲高い、そして奇妙な抑揚の日本語数百語でひっくり返ってしまったのだ。このときのぼくはまだ小さかった上に、戦火から遠い東北の山間に住んでいたせいもあって、新しくやって来た状況と自分とがしっくりしない、世界と自分とがちぐはぐな関係になる、などとそれほど深く思い悩むことはなかったが、昭和二十二年春の学制改革は、状況はいつ変わるかわからず、新しい状況はだいたい